

教宣 せぶん

審判の勇氣

ソフトバレーボールという競技をご存知でしょうか。バレーボールと同じルールで、バレーボールより柔らかなボールを使用するので、こう呼ばれています。ネットの高さも低く設定され、コートはバドミントンサイズ。そのコートに1チーム4人が入ります。競技性よりもむしろレクリエーション性を重視したスポーツということで急速に広まり、手軽に、誰でもできるため、各種、親睦大会などで取り入れられています。

ソフトバレーボールがある程度広まっていくと、当然のことながら競技性を重視した大会が生まれ、勝つことを目標にしたチームが大会に参加するようになっていきます。そうすると、ルールじたいもレクリエーションとしての「曖昧さ」では許されなくなります。先日、あるソフトバレーボールの大会がありました。この大会は地域の公民館対抗の、言ってみれば親睦大会です。しかし、1年に1回行なわれ、回を重ねるごとに競技者のレベルもあがり、「今年こそは優勝をしよう」「今年こそはひとつでも多く勝とう」というムードに、大会そのものになっています。お互いにレベルが高くなる準決勝、決勝戦ともなると、したたかなツワモノたちは、勝つためにヒートアップしてくるので、ルールを無視するようなプレーに出てきます。それは「ホールディング」という反則なのですが、ボールを手で持つことによって、容易に角度がつけられるので、思うようなところに落としたり、運んだり、ぶついたりできるのです。サッカーのスローイングのような攻撃が可能になります。タッチネットやオーバーネット、ドリブルなどの反則は、反則か否かは審判も容易に見極められるのですが、「ホールディング」に関しては、このソフトバレーボールじたいがレクリエーションを重視した競技ということで始まったせいも、「ホールディングの反則をとる」という勇氣が審判はなかなか持てません。そこを踏まえたくてツワモノたちは「ホールディング」攻撃をしてくるのです。ルール上はバレーボールに準じるとしか書いてありません。バレーボールでは誰もが「ホールディング」とわかるプレーでも、ソフトバレーボールでは許されてしまうのが実態です。

ルールに則れば、「ホールディング」は間違いなく反則です。ましてや審判がとれないだろうと見越して「ホールディング」を繰り返す行為はスポーツマンシップにも反しています。この行為を戒められるのは審判しかいません。勝つためだったら反則をおかしてもかまわないという流れに歯止めをかけられるのも審判の判定です。この親睦大会をルールに則った健全な大会に戻すことができるのも審判しかいないのです。ジャッジマンの「勇氣」が求められるケースがこんなところにもありました。